

献 辞

横塚祥隆先生が2008年3月末日をもって本学教授を定年退職される。それを記念して、本『ヨーロッパ文化研究』第27集を先生に捧げ、私たちの先生に対する感謝のしるしとさせていただく。

先生は、1968年4月に文芸学部専任講師として着任し、72年に助教授、82年に教授に昇任され、40年の長きにわたって成城大学に奉職された。

先生のご専門は、ドイツ・キリスト教文学である。18世紀のシュヴァーベンの敬虔主義者フリードリッヒ・クリストフ・エッティンガーやバロック期の聖職者詩人フリードリッヒ・フォン・シュペー、さらには20世紀のキリスト教文学ではゲルトルート・フォン・ル・フォール、カトリック的世界観と神秘主義の作家エリザベト・ランゲッサーそして反ナチスの抵抗作家ラインホルト・シュナイダー等の研究に力を注がれた。この分野での翻訳では、シュタインヴェンダー著『強制収容所のキリスト』（日本基督教団出版局、1977年）がある。また、キリスト教文学研究の延長として、『聖書を彩る女性たち』（小塩節監修、毎日新聞社、2002年）では、分担執筆されている（Ⅲ「新約を生きた女性たち」1「エリサベト——この子の名はヨハネ」）。翻訳で見逃してはならないのは、トーマス・マン著『トーマス・マン日記1940-1943』（紀伊国屋書店、1995年、森川俊夫との共訳）であり、これはトーマス・マン研究者には必読の書となっている。

教育においては、先生はドイツ文学研究、ドイツ文学特殊研究等を講じられたが、学生たちにとってはじゅんじゅんと説いて聞かせるかのような授業であったと聞く。そして先生を敬愛する学部生、大学院生を多く育てられた。また先生はとくにドイツ語教育に熱心で、教科書の執筆やドイツ語検定

試験には積極的に関わられ、終始ドイツ語教育にご尽力された。

大学運営においては、ヨーロッパ文化学科主任、教務主任、ヨーロッパ文化専攻主任、そして2005年からは成城学園教育研究所長を務められた。ヨーロッパ文化学科は1976年4月に創設されたが、その準備から発展充実に大いに寄与された。先生が退職されると、ヨーロッパ文化学科の創設から現在に至るまでの経緯を詳細に知るものはいなくなる。ヨーロッパ文化学科と一心同体であった先生が去られることを思うと、心もとない気持ちに誘われる。

先生は研究であれ教育であれ大学運営であれいつも泰然と構えて、まるで熟れた栗がほとりと落ちるのを待つかのように、腰が据わっていた。かつてのよき時代の大学人、研究者の姿を彷彿とさせる。近年の多忙な大学にあってそんな先生をお送りするのは、ひとつの時代の終焉を感じさせる。今後は、私と同様の趣味だをご推察される多眠を十分されて、お体を大切にされますよう、そしてときにはヨーロッパ文化学科をお訪ねくださりご意見やご批判を賜るようお願いする次第である。

2008年3月

北山研二